

「兵庫E U協会」第1回総合セミナー  
「ユーロ導入10年 (Euro 10 years from introduction)」

平成21年6月10日 (水)

○フーバー 皆様、歓迎をいただきましてまことにありがとうございます。

皆様、一方通行の講義というのは慣れておられるかもしれませんが、本日はむしろ、双方向でやらせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

ですので、私、突然皆様方のもとに近寄っていった質問をさせていただくこともあるかもしれませんが、どうぞ驚かれませぬように。

始める前に、早速ですけれども、皆様に質問があります。

そもそもなぜE Uはできたのでしょうか。

我こそはということで答えていただける方、いらっしゃいませんか。

これは非常に重要な質問です。

○参加者 私の知っている範囲では、昔E E Cというのがありましたね。それがしばらくしてからE Cになりまして、それからE Uになったという感じがするんですけども、当初は経済統合といったようなことで始まったと思うんですけどね、それがユーロということで、どっちかいいましたら共同通貨となったということで、非常に私関心を持って見てるんですけどね、当初のE E Cから非常に変わったなという感じを受けております。

以上です。

○フーバー ありがとうございます。

まさにおっしゃっていただきましたとおり、経済協力ということが根本的なものとしてあるわけですけれども、それに加えて、やはり2つの世界大戦を経験した後の政治的な平和、これも非常に重要なコンセプトでございます。

そしてその平和ですけれども、平和を保障するにはどうするのが一番いいのでしょうか。そしてこのE Uの創立の父たちの発想といたしましては、この平和というのは経済協力をもって成し遂げることができるという、そういった考えに基づいております。

ですので、経済協力と一口に言いますが、常にその背後には政治的な考えがあると、このように言えるかと思えます。

そして、このユーロも例外ではなく、その背後には政治的な考え、理念といったものがございます。

どなたか、もう少し補足なり、ちょっと手伝っていただけませんか。このユーロの背後にある政治的な理念、考え方というのはどういうものでしょうか。

例えば、ご自身が、仮にミッテラン大統領だと仮定してみましよう。その立場にあるときに、なぜユーロなのかということで、どなたかごさいませんか。

○参加者 よくわかりませんが、できたのは、これやはり冷戦の間のことですので、ソ連連邦、東側とアメリカ、西側との間に立って、中立の間を保っていくという、そういう政治的背景があったんじゃないかと思えます。

○フーバー 非常におもしろい、ありがとうございました。

実は、皆さんが思っただけ以上に、割とナショナルリステックな考え方なんです。そのミッテラン大統領の考え方、まさに日本の政治家の皆さんが考えておられるようなこととほとんど同じようなことを考えていたんです。

日本の政治家の方々、朝鮮半島は1つよりも2つの方がいいというふうには考えていると。ミッテラン大統領も、ドイツは1つよりも2つの方がいいと考えていました。

ですので、そのユーロの背後にある考え方というのは経済ではなかったんですね。それはまさに、フランス、あるいは英国がドイツからドイツマルクを取り上げるという、そういう発想にあったということです。

そして、ドイツとしては、ドイツの分列、国立銀行ヨーロッパに輸出をすると、そのコンセプトに輸出するという、そういった思惑がありました。

こういった形でいろいろな思惑が交錯しながら妥協点を見出していった、これがユーロであったのではないかと思います。

そして、フランスあるいはEU諸国、このユーロの導入に伴いまして、その以前はやはり政治的に依存をしていた、国の政治に依存をしていた中央銀行、これに独立性を与えようということになったわけです。

ですので、フランスはユーロを導入するかわりに、独立性を持つ中央銀行というものを手に入れたわけであります。

それでは、その考え方、コンセプトというのが実際にいかにして実現をされたかということをお話ししたいと思います。

これはやはり何年も時間のかかるプロセスではありますけれども、ただ確実に前進をしていく、そういうプロセスであります。

最初のコンセプトというのはEU設立当初から既に上がっておりました。ただ、マーストリヒト条約が締結されてから、ようやく動き出したということでもあります。そのマーストリヒト条約によりまして94年に欧州通貨機関が設立をされました。

当時、そんな通貨統合できるわけがないとみんなは思っていました。日本でも、だめ、だめと言うのと同じように、もう絶対無理だよと、そういう考え方が広がっていました。

ただ、実際には決してだめではなくて、導入がされ、今年10周年を迎えるわけであります。ですので、皆様このEUを見ていただくときに、決してビッグバンのように、一気に何かが進むという、そういったものではありませんけれども、ただ見えない、本当に小さなステップが一つ一つ確実に進んでいるということ、こういった見方で見ていただきたいと思えます。

砂漠のキャラバン隊ありますよね、そういうところに私よくたとえるんですけど、ラクダで、こんなことに、本当にゆっくりとゆっくりとしか進まないんですが、ただどんなに天候が悪くても、そしてどんなに状況が厳しくても、確実に一步一步進んでいくという、こういうキャラバン隊によくたとえて私は話をしております。

そして、この統合が成功したわけでありますけれども、その実際に原動力になっているのは、加盟国の規模は大きくないかもしれないけれども、小さい規模の加盟国がここでや

っぱり一気に進めたいという、そういった思いが実は原動力になっていたりするわけです。

そして、本当に徐々に徐々にではありますけれども、ほかの加盟国に対しても、これができるんだということで少しずつ説得をしていくわけです。我々これをコミュニティ手法といいますか、コミュニティメソッドと呼んでおりますけれども、非常に特別な手法です。

大事なのは結果なんですね。モチベーションがあるかどうかということももちろんありますけれども、やはり重要なのは結果であります。

ドイツはこの中央銀行の独立性といったものを広げたいと考えていました。逆に、フランスは強力なドイツマルクを何とか崩壊させたいと考えていたわけです。そして、私の出身国、オーストリアがイタリアの通貨に対して切り下げられるという、それを何とか食い止めたいと考えていました。ということで、それぞれが違った思惑を持ちながら、何とかユーロを進めていこうという方向になったわけです。

ですので、この数を見ていただきましても、導入当初は11カ国でありましたけれども、現在ではそれが16カ国とふえております。そして、北欧諸国も入ってきております。ユーロ圏に入りたいということで、今非常に熱心に取り組んでおります。

今日のユーロ圏見ていきますと、人口が3億2,800万人を超えております。そして、このユーロの基準をまだ満たしていない加盟国が9カ国あります。そして、2カ国、この黄色で表示している国々ですけれども、もうユーロはやらないということで決めている国が2カ国あります。

ここの英語ですね、2つ目の点のところ、9加盟国がまだ基準を満たしていないと書いてありますけれども、これは必ずしも真実ではないんですね。皆さんおわかりでしょうか、ある1カ国は基準を見たしながら、ユーロはやらないと言っている国があります。どこでしょう。おわかりになりますか。

○参加者 UK。

○フーバー UKはオクトアウトの方に入ります。この黄色のところです。

このマーストリヒト条約のユーロの部分、そもそも署名をしていないのが英国とデンマークということで、これは適用除外になります。それ以外でということになります。

基準を見たしながらユーロを採用していない国、どこのことを私は言っているのでしょうか。

○参加者 スイツァランド。

○フーバー スイス、スイツァランドとありましたけど、スイスではないんですが、Sから始まります。

○参加者 スロベニア。

○フーバー スロベニアではないですね。

○参加者 スウェーデン。

○フーバー はい、スウェーデンですね。これヨーロッパの専門家ということで、差し上げます。

ここでは、今スウェーデンとありましたけれども、いかに我々が段階的に少しずつ進んでいるかというのは、ここの例でもおわかりいただけるのではないかと思います。

このスウェーデンの国民は、今のところこのユーロを支持しておりません。

マーストリヒト条約に基づきますと、スウェーデンというのは、今の基準を満たしているということで、このユーロを採用しなければならないと、そういうふうになっているんですけども、政治的な理由から、そういった配慮から、もう少し時間をあげようということになっております。

現在、世界的な金融危機ということでありましてけれども、そういった状況に陥って初めて、やはりスウェーデンもデンマークも今となつては、このユーロを採用しなかったのは間違いだったと気づき始めています。

次の質問、もう一つあります。

ヨーロッパにおける環境基準、これを厳しいものを入れていこうということで、最も協力を主張しているのはどの国でしょうか。

ちょっと言いかえますね。このEU加盟国の中で、このEU議会あるいは政府に対して、もっと環境基準の適用を厳しくしていこうということで、強力に推しているのはどの国でしょうか。

○参加者 ジャーマニー。

○フーバー どうでしょう。

○参加者 フランス。

○フーバー グループとかも考えてください。国でなくても。グリーンピースとか。

○参加者 グリーンパーティー。

○フーバー グリーンパーティー、今ありましたね。グリーンピースもそうですね、グリーンパーティー。ただ、一番強力に推しているのは、聞かれたらびっくりされるかもしれませんが。

○参加者 ヒントをお願いします。

○フーバー ドイツと関係ありますね。最も環境基準が厳しい国のある産業、ある業界団体ということになるでしょう。

国というよりは、各国の業界団体ですね、これがやはりもう既にある程度の投資をしているわけですから、これをさらに進めたいと主張をしているわけです。

今、このようにお尋ねをしましたのは、なかなか一つの政策を推し進めるにしても、どこか1カ国が強力に推し進めているわけではなくて、今回のこの環境基準のように、割と横断的に、国をまたがって推し進めていることもありますので、どこが一番強力に言っているのかって、なかなかわかりにくい部分があるという、そういった例をお示ししたくてお話をしました。

まず、フレキシビリティ、柔軟性ということがありますが、高度な基準を適用するのか、もう最高レベルの基準を適用するのか、そのあたりが重要なので、基準のレベルをどこに持っていくかという、このあたりに柔軟性を持たせる必要があります。

そして、最高レベルの基準を満たせるところがほかの国を引き上げていくという形になってます。

これは環境についてもそうですし、ユーロについても同じことが言えます。

こういった形でどんどん押し上げられていって、どんどん前に進んでいくということで、自然にそういった前に進む動きが起こってまいります。

現在の状況がどうなっているかと申しますと、参加しない方が参加するよりもコストがかかってくるという状況にあります。この強力なユーロに守られている人の数が3億2,000万人います。そして、残りの1億8,000万人がその通貨が切り下げられるかもしれない、そういったリスクを抱えながら生活をしているということになります。

そして今、強力なユーロ、強いユーロという話をしましたが、例えば円に対して、あるいはドルに対して強いとか、そういうことを言っているわけではありません。それ自身の持つ強みということをおし上げております。実際、ここの数字を見ていただきますと、21%であるとか、16%という数字が出ておりますが、アメリカが7%、日本が11%ということで比較していただければと思います。かなり高いですね、比較していただいても。これはEU域内の貿易もここにはカウントされているからこのように高い数字が出ています。例えば、オーストリアのような国の場合、EU域内の貿易というのは、全体の貿易に占める割合の何%ぐらいでしょうか。10%ですか。

○参加者 60%。

○フーバー 1つお持ちですけども、もう一つ別のものを差し上げます。もっと多いんです、実は。

○参加者 70%。

○フーバー もっと多いです。

○参加者 80%。

○フーバー その間ですね、80%という声がありましたけど、・・・。

ここでもわかりますように、EU域内の貿易というのが非常に大きな割合を占めているという実情がございます。ですので、このユーロを採用しているユーロ圏の15カ国の方に入るのか、あるいは入らないのかということは、大きな大きな違いになってくるわけです。

英国のポンドは切り下がっています。これは経済危機の影響、金融危機の影響を大きく受けています。バルト海諸国につきましても、この通貨の切り下げを非常に迫られている状況でございます。

この青いところがユーロ通貨圏ですけれども、もちろん対米ドル、あるいは対日本円に対してどうなのかということも見ていく必要はあります。それももちろん重要であります。ただ、域内が70%ですので、その残りの30%の部分にしか相当しないんですね。ですので、EU域外との貿易は30%ないし35%という、それぐらいの規模になっているということです。

ですので、先ほど来申し上げておりますけれども、段階的に徐々に進んでいるという状況です。

そして、それぞれの思惑、モチベーションが異なるということも申し上げました。

ただ最終的には、こういった思惑であれ、結果が、成果が出ているわけです。

そして一般の市民も、ユーロの導入についてはハッピーであると、導入してよかったと思っているようです。日本の観光客もそうです。ヨーロッパを旅行して、それぞれの国の

通貨に一々両替する必要がありませんので、日本の観光客もハッピーですよ。

このスライド、実は金融危機が起こる前につくったものです。ただ、ユーロによって雇用が創出されたこと、これは事実であります。ファイナンシャルインキュベーション、これ金融統合でありますけれども、ヨーロッパ化ということに通じます。それまでは1国単位、国単位で考えていたところを、日本と同じですね、日本の証券会社は、例えば日本の国債を買うと、同じようにイタリアの証券会社はイタリアの国債を買うということが今までは通常に行われておりました。ただ、現在では、国単位ではなく、国境を越えた取引というのが活発に行われております。

第2点目、これはより均衡のとれた予算ということですが、これは特にコメントをせずに置きます。これはもう過去のことですので、置いておきましょう。

ここでは、第2点目を特に申し上げたいと思いますけれども、外的なショックからある程度守られている、それに対する抵抗力ができているということを申し上げたいと思います。

先ほど来申し上げておりますけれども、貿易の70%がEU域内の貿易ということですので、そういった割合を考えましても、外部からのショックについては非常に強くなっていると言えると思います。

そして、一番重要なのが、最後の点ですが、先ほどドイツというのは、この中央銀行の独立性、このコンセプトを輸出したんだという話をさせていただきましたが、イタリアから見ると、そのメリットというのは、金利が下がったということが非常に大きなメリットでありました。14%近くあったんですけれども、すぐにドイツのレベルにまで下がって、急速に下がりました。ですので、長期金利が下がったこととによってユーロの恩恵を受けた国というのは数多くありました。

ただ、ここでちょっと注意をしておかなければ、注目をしたいのがこれにはやはりコストがかかるということがあります。これはリスクを伴うということがありまして、例えば昨年はイタリアの金利の方がドイツの金利の方が高くなったというような、そういった逆転も起こっています。ですので、ユーロを導入することによって低金利の、そういった恩恵を享受することができるということがありますが、ただ将来的に切り下げをするというような、そういった可能性は放棄をするということになります。ですので、英国ポンドは価値が下がりがちで、昨今の金融危機を受けて、ここもそうですし、スウェーデンも通貨の切り下げを行っております。ただ、イタリア、あるいはギリシャといった国々はユーロ通貨圏に入っているがために、今さら切り下げるといったようなことはできない、そういった立場にあります。

ですので、競争力を保つという、そういった観点からユーロ通貨圏の諸国というのは、通貨の切り下げをするという、そういった選択肢は持っておりません。それはユーロ域内という話であります。

そういった状況でありますので、特に先進的な国々、例えばドイツといったような国では、やはりその周辺国、ユーロ通貨圏のほかの国々の金融政策であったり、経済政策に対して大きな発言力なり影響力を持つこととなります。

この金融危機以前は、もう少し各国の予算が均衡していたんですが、ただ残念ながら金融危機によりまして、これも過去の話となってしまいました。

ここで少し時間をとりまして、日本との比較、この観点からお話を申し上げたいと思います。

ヨーロッパにおける競争、これを考えた場合には、ユーロ通貨圏の国々、ドイツ、フランス、イタリア、そういった国々同士の競争というものが見られます。ドイツ製品が例えばフランスで競争力を急速に失うといったようなこともあり得るということです。同じ通貨を使っているわけですから、やはりその生産のコストを抑えるなどして競争力を維持していく必要があります。例えば、品質を向上させるといったことも含まれるでしょう。あるいは構造改革をやるとか。ということで、このユーロ通貨圏の中から起こってくる、内から起こってくる圧力といったものがあります。やりたいことだけをやっているという、そういう場合ではないわけです。

何かあったら、コミュニティがやはりそのリスクを負うことになるわけですから、日本では逆にこういったプレッシャーというのはないのではないのでしょうか。私のように、第三者的に外から見てみると、日本で構造改革が大々的に進まないのうなずけると、さもありませんというふうに思ってしまうわけでありまして。

そして、ユーロの成果のもう一つで、その側面をお話ししたいと思います。

これは雇用創出でありました。あります、ありました、両方でしょうか。多くの企業がヨーロッパの製品を買うという、こういった話をしているときに、ユーロという単一通貨が導入されて、一つの市場であるということを見るわけです。そういったことを考えると、ヨーロッパの製品には優位性があると、そのように考えるわけです。先ほどちょっと構想改革という話をさせていただきましたが、この構造改革によっても雇用が創出されました。ただ日本も同じですけれども、新規の雇用といっても、これはフルタイムの雇用ではなくて、正社員の雇用では必ずしもないと、これは日本と同じでしょうか。

ですので、一たん危機が起こるとあつという間に失われてしまう、そういったたぐいの仕事、雇用ということになります。

ここで少しEUの拡大ということについて詳しくお話をしたいと思います。

ギリシャが加盟したのが2001年、スロベニアは、旧東欧諸国としては初めて加盟をいたしました。キプロスとパルタ、小さな島ですけれども、こちらも入っております。スロバキアが今年ということであつております。

この2009年の今日に至っても、チェコはまだ入っておりません。旧チェコスロバキアだったわけですが、スロバキアは入っていて、チェコは入っていないというのがこの2009年、現時点なんですけれども、チェコとスロバキア、どっちがハッピーだと思いますか。

旧東欧諸国見ましても、半分はユーロに入っていて、半分は入っていないという、そんな状況なんですけれども。

うなずいてらっしゃる方もいらっしゃいますが、会場に。

今は、やはりスロバキアの人たちはユーロに入ってよかったと言っています。

購買力についても、やはりこれまで購買力が下がるという、いろいろな懸念があったんですけども、ユーロに入ってそれは解消されたといったことでハッピーであります。

例えば、スロバキアで1ユーロを稼ぐと、それはブリュッセルなり、ほかのパリなり、ほかの都市でも同じ1ユーロなんです。

さきにモチベーション、ユーロ導入の意気込みがどうなのかというような話も少しさせていただきましたが、国家主義的な理由、背景というものを少しお話ししたかと思えます。ただ、それ以外にも、実はほかにもいろいろな理由がありまして、ここでEU諸国がユーロを採用するのに至った一番重要な理由、なぜユーロを導入することになったか、その一番大きな理由というのは何だったか、これを皆さんにちょっと考えていただきたく、これも一つ皆さんにギフトを用意しておりますので、どなたかごさいませんでしょうか。

○参加者 国の理由ではなく、貿易の取引の際に、一々両替をしなくていいということで、これが一番大きな理由になったのではないかと思います。そういう直観ですが、どうでしょう。

○フーバー このギフトが、中身が実は女性向けですので、女性の方にお答えいただいた方が。

○参加者 ヨーロッパ圏の小国が一つのユーロを導入することで対外的にヨーロッパの経済的な地位が上がるということが影響としてあるんじゃないでしょうか。

○フーバー 二つありましたので。

そうですね、確かにおっしゃるとおりなんですけれども、もうちょっと何かあるんですね。

○参加者 やはりドルに対抗する、アメリカのドルがやはり世界的に大分強いですからね、対抗するというところで。

○フーバー 奥さんいらっしゃいますか。奥さんいらっしゃったら差し上げてください。

そうですね、まさにおっしゃるとおりで、まずは域内ということを見ているわけですけども、やはりそれは、それをさらに全世界に広げていきたいと、そういうふうに思っているわけです。

アメリカのやり方ではなくて、もうちょっとスマートなやり方でやってほしいと思っているんですが。ただ、EUは、実は非常にうまく何かを輸出してきたんですね。何を輸出してきたでしょう、何を広げてきたんでしょうか。物やサービスではないんです。

○参加者 テクノロジー。

○フーバー これはどちらかという物・サービスに入りますね。

独占禁止法違反でANAとJALが罰金を受けた、あんな事例がありましたよね、それを少し思い起こしてみてください。ちょっとこれが適当な事例かどうかはあれですけども。こういった製品に関するルールを私たちEUから輸出をしているんですね。例えば、日本における産業でも、ヨーロッパの産業規則あるいはルール、基準、そういったものをより多く、アメリカのものよりも、ヨーロッパのものを採用しているところが多いというのは、皆さんご存じではないでしょうか。

ですので、このユーロの話に戻しますと、このユーロを世界の基軸通貨として確立して

いくと、そういった思いで発足をいたしました。

それでは、対外的にどうなのかということで少し見ていきたいと思います。

実は流通している紙幣を見ますと、ドルよりもユーロの方が多いですね。外貨準備額を見ますと、それほどいい数字が出ているわけでもないんですが、ただ26%がユーロであります。なので、26%という数字、それなりにいい結果が出ているのではないかと思います。

ここで念頭に置いておかなければならないのは、やはり日本や中国といった輸出志向の国というのは、それほど選択肢がありません。例えば、中国の政府の代表者がドルの買う量を減らそうというような話をしているというようなことはよくあるかと思いますが、ただ、これほどの赤字を抱えているのはアメリカしかないということで、なので、ほかに買うものがないと、選択肢がないという状況になっています。なので、この現状の26%は、私どもはある程度満足しております。

ただ、小さい国、規模の小さい国、例えばスロベニアとか、オーストリア、あるいはキプロスというのは、ユーロに所属することによって、それに対して誇りを持っています。それを見ていいなと思って、うらやましいなと思って、またさらにユーロを導入する国々がふえるという、そういう流れを考えております。

先ほど一番最初にお話ししました砂漠のキャラバン隊の話、もう一度思い出してください。私たちはまだゴールには到達していないんですね。成果の終点にはまだ着いていないわけです。EU加盟国が本当に少しずつ、段階的にはありますけれども、ユーロを採用していくという流れになっていくでしょう。英国の場合は、絶対に、将来的にも導入しないという、そんなことも考えられますけれども、いつも1つや2つ、例外というものはつきものです。

質問の時間、後ほど取りますがけれども、質問に入る前に、EUが対外的にどういうふうプレゼンスを高めていくかという、こういった話を少しさせていただきたいと思います。

昨年、日本が議長国を務めた何かありましたよね、何の集まりでしたでしょうか。非常に限られた国しか参加ができない。

○参加者 サミット。

○フーバー まだお持ちじゃないですよ。差し上げます。

そうですね、G8の議長国を務めましたね。G8の写真はちょっと申しわけございませんが、持ってきてないんですが、ただG8だからと言って、8人というわけではないですね。何か国集まったか覚えてますか。8カ国以上は少なくともいましたよね。EUからも実は参加をしていたんですね。難しい話になってきてますが。私は彼を空港まで送っていったので、だれがというのははっきり覚えておりますが。EU委員会としては、空港にいるというのは非常に難しいことで、どういうことかちょっと説明しますね。

G8の会議の場合は、重要度の低い人かまず最初に入らないといけない、到着しなきゃいけない。それがだれかという、EUコミッションのプレジデント、そういうことだったんですね。大久保先生がバローゼ委員長を迎えられたことが、レクチャーに迎えられたことがあるので、ちょっと笑ってらっしゃいますけれども、・・・レクチャーで話を聞

くよりも、彼を2時間空港で待たせないといけない、そのときの気持ちの方が何といいましょうか、複雑なものがあります。EU委員長は、一番乗りをして、そして出るときは一番最後なんですね。アメリカ大統領が最後に入って、そして最初に出ていくという、そういった形になっていねます。

ですので、G8と言いましても、8カ国プラスEU議会、EU委員会ということになっております。ということで、G8と言っても、実は9の参加者がいると。そして、そのEUは二足のわらじを履いて、2つの帽子をかぶっていると英語では言いますが、二足のわらじを履いてやってくるということになります。ちょっとややこしい話だなと思ってらっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが、金融の問題になりますと、もっともっと複雑なんです。というのもEUを代表している人がまたたくさんいるんですね。EU代表という、この人だれでしょうか。ちょっと、写真が小さいので見えづらい方もいらっしゃるかもしれませんが、日本に頻繁に来ていて、小さい国の出身です。EUの中で最も長く首相をやっている人です。先週の日曜日、もう1期続けることになりました。続投することになりました。ルクセンブルグ出身のユンカ氏です。

例えばG8の金融大臣会合、そういったものにも出席を彼はしております。ユーロを代表して出席をします。このユーログループを代表するわけですが、このユーログループというのはユーロの通貨を導入している国々が集まったグループです。ですので、G7あるいはG8の財務大臣会合ですね、こういった会議が行われると、そうするとEU委員会からもだれかが出席をする。EU議会からもだれかが出る。ヨーロッパの中央銀行からもだれかが出席する。ユーログループからもこの人が出ると。ということで、それだけでも大変ですよ、これだけたくさんの人が出る。その4者が出てきてますので、その間の協力をするだけでも大変。

こういったユーロの話をしてまいりましたけれども、これがアジア、あるいは日本にとってどういう意味を持つのでしょうかということで少しお話しをさせていただきます。

私はこのEUというのがよき事例になることを切に願っております。EUを見習って、経済協力することによって政治的な対立、こういったものを克服していただきたいと思っています。ただ今、こちらにアジア版のEUはどうだろうかというタイトルでしてはいますが、これは積極的に進めたいということで出しているわけではなく、逆にこういうことを言っているのかなと思いつつ、ちょっと出しております。

私が最初に皆さんにした質問を覚えておいでですか。なぜEUができたかということをお最初に皆さんにお尋ねしたいと思います。第2次世界大戦直後に平和を保障するという、こういったところがスタート根拠になっております。ですので、経済協力にしても、金融協力にしても、そしてユーロの導入にしても、いずれにしても政治的な平和、これを実現したいという意図があるわけです。こういった確固たる政治的な基盤であるとか、共通の目標、こういったことがなければ、こういった高度な経済協力、こういった次元にまで持ってくるというのは非常に難しいと言えらると思います。

私が期待あるいは希望しておりますのは、日本やアジアの諸国がまたEUとは違った独自の道を模索して、そしてEUを参考にしながら、独自の道を探っていただけ

たらしいなというふうに思っております。

ご清聴ありがとうございました。

皆様からの質問をぜひともお受けしたいと思えます。ご遠慮なく、このユーロの通貨に限らず、何でも結構ですので、ご遠慮なくご質問いただければと思います。

○司会 ありがとうございました。

マイクを持って、皆さんのところへ参りますので、今フーバーさんからのお話がありましたように、ご質問がありましたら、どんどん挙手して発表してください。

○参加者 先ほどユーロの加盟資格があるのに、入らないというスウェーデンがありましたですね。それで、加盟資格というのはどういうふうな、例えば国の財務基盤とか、GDPとか、そういう何か基準というのは、どういうふうになっているのでしょうか。例えば、日本の場合、世界第2のGDPとか言われてますけども、借金が800兆円あると、こういうふうな状況で、仮にユーロの加入するとすれば、資格条件はクリアできるんですか、日本は。

○フーバー 非常に興味深いご質問ありがとうございます。

日本を当てはめると、参加資格はないということです。

ただ、日本と同じような状況の国がEUの中にあつたとしても、その基準というのは、多分、恐らく違った基準を設けることになるのではないかと思います。

といいますのも、EUの統合の基本的な理念というのは、何か排他的なものにするのではなく、妥協をしていくということが基本にあります。3つの基準が実際に数値としては、ありまして、負債がGDPの60%以下であるということ。ただ、その60%の基準を満たしていないからといって、即だめだというわけではなくて、そのあたりは寛大で、その基準を満たす方向にいつているという、そういったことが認められればOKとすることもあります。イタリア、あるいはベルギーといった国はGDP比の負債高が100%近くになっております。ただ、ユーロ圏では認められております。

2つ目の基準というのは、物価の安定であります。ですので、ユーロに新しく参加する候補の国は2年間でインフレ率を2%以下にとどめなければなりません。

あと、為替レートの安定、これが3つ目の基準というふうになりまして、加盟する数年前にさかのぼって、この為替レートが安定しているということが3つ目の条件になります。

ラトビアで今金融危機が起こっていますが、ただ今の段階で通貨を切り下げれば、そのユーロ加盟まではまだ四、五年ぐらいは待たなければならないという状況になってしまいます。

よろしいでしょうか。次の質問。

○参加者 昔、オーストリアにハプスブルク家、王家の統合があつたと思うんですけども、これをユーロに置きかえての統合と見る見方はちょっとおかしいんですか、その辺のところ、いかがですか。

○フーバー 手法が違いましたね、ハプスブルクの場合は。結婚しました。政略結婚でどんどん広げていったということです。

ただ、近親相姦といいますか、近親婚がずっとずっと続いて、代々続いてきたために、

例えば認知症ですとか、そういったことが起こってしまったので、それが果たしてよかったのかということがあります。

今現代に当てはめるとすれば、やはり私は先ほど申しましたコミュニティ手法ですね、こちらの方がむしろうまく機能するのではないかと思います。

○司会 どうぞ。じゃあ、前の方からいきましょうか、順番に。

○参加者 すばらしい講演ありがとうございました。私の方から2つ質問があるんですけども、ユーロには、先ほどおっしゃったようにたくさんいいことがあるということなんですけども、ユーロ域内にはたくさん国がありますけども、各国では経済状況が違うんですけども、独自の金融政策が打てないという問題があると思います。その問題は、どのように対応しているのでしょうか。

2つ目の質問なんですけども、ユーロはまだ砂漠の中を歩いている途中の状態というふうにおっしゃったんですけども、最終的には、最終目標としては、どこを目指しているのか、何か国ぐらい導入させていきたいのか、お考えをお聞かせください。

○フーバー 近隣の話をしたときにお見せしたスライド、こちらに少し戻りたいと思います。ここで懸念されるのは、やはり金利が今下がってきておりますけれども、これがはね上がってしまうのではないかと、あらぬ方向に行ってしまうのではないかとということが懸念されます。数カ月前は、アイルランドとドイツの金利を比べた場合に、アイルランドの方が4%も高かったんです。4%というのは非常に大きな数字です。ですので、これを受けて、アイルランドは格付機関による格付を下げられてしまいました。ですので、ユーロクラブが、いわゆるユーロクラブに入りながら、入ってはいるけど、ユーロが求める安定性だとか、あるいは経済の安定性であるとか、あるいは予算の均衡、そういったものはちょっと無理だというような、そんな言いわけはできないんですね。というのも、それでアイルランドにお金がなくなってしまうと、域内のどこかが貸してあげないといけなくなってしまうので、というわけで、学校に行ってる子供と一緒に、成績が悪ければ、その分、何とかしないといけないということになりますね。金利が上がると、そういったリスクが伴ってくるということです。

ただ、これを受けて、アイルランドが、それでは財政赤字を削減しようという方向に、もしなければ、一時的には圧力に耐えきれずに、そして同時に業界圧力も高まって、国民の間からユーロはやめてしまおうというような、そんな声が上がってしまう可能性があります。今のところ、幸いにしてこういったことは起こっておりませんし、起こらないことを願っております。

ただ、何事も絶対ということはありませんので。ですので、少なくともこれまで達成してきたこと、この成果を今後にも生かしていくという、そういったスタンスでやらなければならないと思います。

2つ目のご質問の方ですね。そうですね、やはりどこかに終着点というのを設定しなければならなくて、オーストラリア、オーストリア、1文字しか英語では違いませんけれども、でもオーストラリアは入りたくても入れません。

ちょっと地図がありますので、今ちょっと探しておりますが、こちらですね。このまだ

色の塗られていないところですね、見ると、まだ参加をしたい、参加をする可能性のある国というのは、まだたくさんあります。どこの国でしょうか、参加したいと思っている国ありますよね。

○参加者 ターキー。

○フーバー トルコ、アルバニア、ウクライナもそうですね。入りたいと思っているけれども、まだ正式には認められていない。なので、終着点、目標がどこなのかというのは、非常にいいご質問だと思います。

欧州条約では、欧州の国であれば、どこでも加盟を申請することができるかと定めています。となると、欧州というのは、ヨーロッパというのはどこまでなのかと、どこが限界なのか、地理的な限界、境界はどこなのかという問題が出てきます。

○司会 ありがとうございます。じゃあ、最後、もう一人、最初に手を挙げた、今の方の後ろの方、ありましたね。マイクをお願いします。

○参加者 本日は貴重なご講演ありがとうございました。ユーロのいい点として、ジョブクリエーション、雇用創出というお話があったと思うんですけども、現在、スペインとか、ギリシャでは、特に若者を中心に余り雇用情勢がよくないという話が伝わってきているんですけども、こういう雇用情勢が余りよくない国というのをEUとしてはどう考えているのでしょうか。また、それぞれの国に雇用の面で期待していることというのはあるのでしょうか。

EUとして、雇用の失業率が高い国をどう思っているのかということと、それぞれの国にどういうことを期待しているのかということです。

○フーバー EUというのは、ファンド、資金を豊かな国から貧しい国、持てる国から持てない国への移転ということとをコンセプトとして挙げております。

ですので、そういった観点からギリシャ、アイルランド、スペインといったような国は、この何年にもわたって、GDPの2%ないし5%の支援を既に受けております。

本当の話なんですけれども、アイルランドは、過去25年間、GDPの数%、2%、3%といったものがブリュッセルから支援という形でアイルランドに送られてきたんです。それは、金額にすると相当なものです。アイルランドでは、ただ非常にうまくいきました、スペインでもうまくいきました。残念ながらギリシャはうまくいきませんでした。ですので、お金を注入したからいいというわけではないというのがこれでもわかると思います。

そして、スペインも全部支援を受けたお金をインフラに注ぎ込んだ、これもよくなかったのではないかというようなことで、今では言われております。

また、アイルランドにしても、外資系の企業に対して、税制優遇を行うためにその資金を使ったということで、これも果たしてよかったのかどうかといったようなことが言われています。

資金援助ということだけを見ますと、EUというのは、世界のほかのどこよりも非常に熱心にやっていると言えます。

ただ、その資金援助を受けても、それを実際に使って、それでもってどうするのかということを決めるのは各国の判断になります。

○司会　・・・お願いします。

○・・・ きょうは大変ありがとうございました。冒頭におっしゃられた経済統合によって平和を達成する、全く賛成でして、EUのそもそものが石炭、鉄鋼、ドイツ、フランスにそれが始まったという理念が発展してきたということだと思いますが、私の質問はちょっと現状と、それから将来のことについて、やや専門的なんで恐縮なんですけども、2つだけ、ぜひお伺いしたい。

やはり、金融恐慌が起きるといことは、大不況になって、第2次大戦を引き起こしたということで、このたびは戦争が起こるとは思いませんが、また今のようなアメリカのやり方だと、再びフィナンシャルクライスが来るのは間違いないと私は思っております。そのためには、金融機関の規制ですね、レギュレーションをもっとしっかりせんといかん。アメリカは非常にリラクタントであると。ドイツなどは非常に前向きなんですけども、うまくヨーロッパの中での金融規制というのは国で・・・してやって、統合してないという弱みがあるので、それについてEUの中でどういうふうに議論されているか、時間はありませんけれども、それが第1点です。

それから、2番目はちょっと夢物語になるかもしれませんが、第2次大戦後、結局、ブリテン王室体制というものをつくったのは、やはり平和を何とかしたいということがあって、それにはやっぱり世界のキカルソの制度をどうするかという問題だと。ドルですけども、将来ブリテン王室にかわる、そういう世界通貨に向けてのカンファレンスのイニシアチブはユーロしかとれないと思うんですけども、ブリテン王室はニューハンプシャーですけども、バーデン・バーデンでそういう会議が開けんものではないかと。バーデン・バーデン・アグリーメントというのができないかと。そういうのが議論されているのかどうかという2つ。

○フーパー　非常にご意義多いご質問ありがとうございました。やはり、金融危機となるというろんなことを皆さん考えますよね。若い世代は、どちらかというともっと実際の、プラズマティックな考え方をする人が多いと思うんですが、私の子供にしてもそうですよね。これは私の子供もそういうふうに言ってるんですが、子供に聞かれるんですね、何で大きな車が要ると聞かれるんですが、若い世代というのは、实际的に考えるので、今まで既成概念としてあった、車はもっと大きく、家はもっと大きく、消費はもっとふやす、こういった概念を、なぜそうなのということで、改めて問いかけてくるんですね。若い世代が望んでいるのは、何事も大きく大きくというのではなく、持続可能なものを望んでいる。そういった意味では、この若い世代、非常に希望が持てると私は思っております。

ただ、おっしゃったように、まさにこういった大きな金融危機に見舞われますと、どうしても社会的な緊張が高まるというのは事実だと思います。

このために、日本とEUが今こそ共同して、世界によい模範を見せていく、そういった時期に来ているのではないかと思います。

そして金融市場に関してですけれども、EU内でもさまざまな議論が巻き起こっております。例えば、ドイツはEUは市場の自由化に余りにも肩入れし過ぎたんじゃないかというような、そんな声も上がっております。

一方、英国はいわゆるアングロサクソンのモデルを、これがいいんだということで堅持をしているという、そんな感じになっています。

ですので、来月、近々非常にホットな議論が行われると予測しております。

そして、将来的な世界の基軸通貨ということですが、個人的にはユーロしか選択肢がないというようなことはあってほしくないなと思っています。

EUにはアメリカのようにはなあってほしくないと思っています。もちろんアメリカに対する憧れというはあるんですけども、私自身もそうです。ただ、非常に多極的な世界の中にあっては、その力を持った極が複数あって、その中でどうしたらいいのかというのを一緒に考える、そういった位置づけがいいのではないかと思います。

そして、このユーロについても、やはりさまざまな妥協が行われた上で生まれたものがありますし、いろんな意見を集約してできたということでは、非常にいい模範になると思います。

この先ほど申しました多極的な構造、スキームに日本が参画するというのももちろんあり得るんだと思います。

○司会 ありがとうございます。もう時間が参りますので、皆さん、どんどんご質問、たくさんあると思うんですけども、このあたりで一度終了させてもらいたいと思います。

今日は5時半から交流会を隣の兵庫県立美術館のレストランの方で設けてますから、そちらの方にご参加される方は、ちゃんと通訳もおりますので、今日のお話振り返って、またそういった場を利用して、フーバーさんの話を聞かれたらどうかと思っております。

今日は、非常に講師先生の話術で、話が巧みで、インタラクティブな、双方向の形での講演会になりまして、やる方も、それから聞いている我々の方も非常に緊張感の中で、ずっとこのテーマでお話を聞けたと思って、非常に意義のある、内容の濃いセミナーになったと思っております。どうもありがとうございました。

私ども兵庫EU協会は、EUと兵庫県との関係をどんどん深めていくというようなことを目的にして、事業活動をやっております。今日はそのEU協会の会員の方々もたくさんお越しになってますけども、もしEU協会の会員にまだなっていない方、今日資料の中に、その会員の加入の申込書なども入れておりますので、今後またいろんなセミナーや、その他のいろんな事業をやっていきたくて思っておりますので、ご参加のほど、またご検討していただけたらと思っております。

それでは、時間が参りましたので、これをもちまして兵庫EU協会の第1回の総合セミナーを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

